



写真3:学生組合が運営するバス



写真4:キャンパス内にある警察署のバイク

学校で学ぶ短期留学プログラムも実施しています。

滞在しての第一印象は、大学と都市の関係が逆転しているというものでした。つまり、デイビス市の人口が約7万人なのに対し、デイビス校の学生数は約3万5千人と過半を占めています。このように小都市に明治大学並みの大規模大学があるため、校内の食堂や売店等で働いているのはほぼ全てが学生で、市内のバスも学生組合が運営しています（写真3）。初めてバスに乗った

際の運転士が、二十歳前後の女子学生だった驚きは忘れられません。またキャンパス内には、独自の警察署や消防署、飛行場まであります（写真4）。さらに、到着時のオリエンテーションの担当職員が市長を兼務していたことにも驚かされました。このように、「大学があるから都市がある」のが、デイビスの特徴と感じました。

デイビスには、妻と当時は中学3年生の長女を帯同しました。滞在期間はわずか1年間で、日米の学期のずれのため、家族は

さらに短かったのですが、多くの人と知り合うことができました。長女は平日には現地の中学校に通い、土曜日にはカリフォルニア州立大学サクラメント校で開校される日本人補習校に通いました。デイビスには、日本人やアジア系の米国人が比較的多かったことも、溶け込みやすい一因だったようです。

家族を伴っての海外赴任は、前職時を含めると今回で3回目です。海外では、家族が協力して想定外の事態に対処を求められることが多い一方で、通常は時間的なゆとりもあり、家族の絆を深める良い機会だと思っています。長女の現地の長期休業時には、州内にあるヨセミテ国立公園をはじめとして、米国内のさまざまな場所を訪問することができました。

最後に、農産物貿易を専門とする研究に関しても、米中の貿易戦争や日米の貿易交渉で注目が集まる中、カナダでの国際学会で研究成果を報告したり、米国政府の高官に会ったりするなど、研究の深化に向けた多くの有益な機会が得られました。今後とも、今回の在外研究で得たつながりを大切にしていきたいと考えています。



United States of America

カリフォルニア大学 デイビス校滞在記

作山 巧 Takumi Sakuyama

農学部専任教授
専門:貿易政策論

1965年 岩手県生まれ
1988年 農林水産省入省
1994年 ロンドン大学優等修士(農業経済学)
1995年 サセックス大学修士(開発経済学)
1999年 外務省OECD日本政府代表部一等書記官(在パリ)
2004年 国連食糧農業機関エコノミスト(在ローマ)
2007年 農林水産省国際部国際交渉官

2011年 青山学院大学博士(国際経済学)
2013年 明治大学農学部専任准教授
2018年より現職
主な著書・論文
『食と農の貿易ルール入門』(昭和堂・2019年)
『日本のTPP交渉参加の真実』(文真堂・2015年・日本貿易学会奨励賞受賞)
所属学会
日本農業経済学会、日本国際経済学会、日本貿易学会等



写真1:カリフォルニア大学農業問題センターの建物

2018年4月から1年間、在外研究で米国カリフォルニア大学デイビス校の農業問題センターに訪問研究員として滞在了しました（写真1）。同校は、カリフォルニア大学システムを構成する10校の一つで、カリフォルニア州の州都であるサクラメント市から西に25キロメートルに位置しています。メインキャンパスの総面積は22平方キロメートルと広大で、東京ドーム約500個分に相当します。

カリフォルニア大学デイビス校は、カリ

フォルニア大学バークレー校の農業専門学校として1908年に開校しました（写真2）。その名残で、同校のスポートチームは、「農業大学」を意味するAggies（アギー）が愛称となっています。タイムズ・ハイヤー・エデュケーションによる2019年の総合ランキングでは世界で59位、クアアカレリ・シモンズ社による同年の分野別ランキングでは、農林学や獣医学で世界2位であり、国際的にも高い評価を得ています。

明治大学とは協力協定が締結され、大学間協定やサマーセッションズ・プログラムでの留学が可能となっています。また農学部では、春季休業中に3週間程度、ホームステイをしつつカリフォルニア大学デイビ



写真2:農業大学の名残で大学のシンボルのサイロ